

水辺の考古学

～京都盆地の河川と人間活動の歴史～

〔水辺の都の自然観〕 都人にとって水辺は身近な風景でした。長岡京、平安京ともに河川地形が発達する左京が台地の右京にくらべ繁栄しました。長岡京「東院」は葛野川（桂川）の分流、寺戸川のほとりに営まれました。敷地の一角に川の水を引き入れます。水辺に水辺の景色をつくります。古代中国の自然観では、水は大地の血にあたります。生き生きとした血流の存在が大地の健やかさを意味します。動く水と接することで、都とそこで生活する人々の発展を願う「ちしんごういつ地人合一」の世界があったと推察します。「いしよくどうげん医食同源」の考えに通じます。



拾う考古学(木津川河床遺跡2009. 2)

かつて中山修一先生は左京の低地を発掘して、街路の側溝が氾濫で埋もれた様子を観察されました。その後の調査成果から、災異が遷都の引き金の一つに数えられるようになりました。はたして水辺の低地に対し、都人たちは単に危険性をはらむ土地条件評価を下したのでしょうか。近代的環境評価・基準のみに頼らない解釈が必要です。

〔水辺の遺跡をしらべる〕 下右イラスト「近代自然地理学的景観図」上端に描く大形ダム。本来河川が山間地から下流に運搬していた土砂を堰き止めます。木の切りすぎで禿山になっていた周辺の植林も進められます。結果、水の増えた川は自ら河床堆積物を押し流し、川岸を掘り下げ崖地を作ります。灌漑用水の取水口、支流河川の合流点が壊れます。桂離宮の昭和の修理は不同沈下が原因でした。川底低下によって基礎を支える地層が変形したと推測されています。同じ頃、コンクリート骨材用に砂利採取が進行していた木津川下流部の河原が、弥生～中世遺跡の包蔵地として周知されるようになりました（木津川河床遺跡）。割れて偽礫（粘土の固まり）となった遺跡の地層、遺物が大水ごとに洗い出されます。「天然のトレンチ」です。

桂川の舟旅の試みでは淀納所の崖で中世の河道を確認しました。海拔高度付近まで河底が掘れた宇治川(中書島)は、巨椋池の発達史に関わる地層が崖にむき出しです。水辺の遺跡調べは近代前・後の河川の歴史、景観変化をうかがい知ることにつながります。

〔部屋で眺める水辺の景色～京都御所襖絵(ふすまえ)『嵐山春ノ景図』をスケッチ～〕

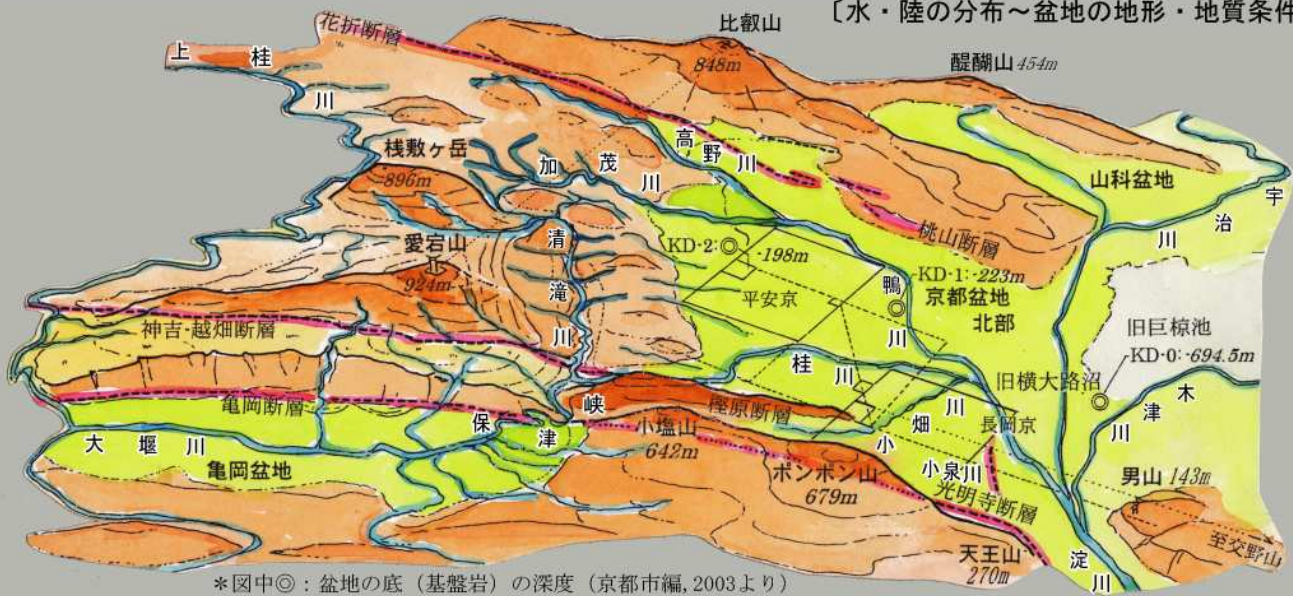
〔水が形づくる地形とくらし～近代自然地理学的景観図解～〕



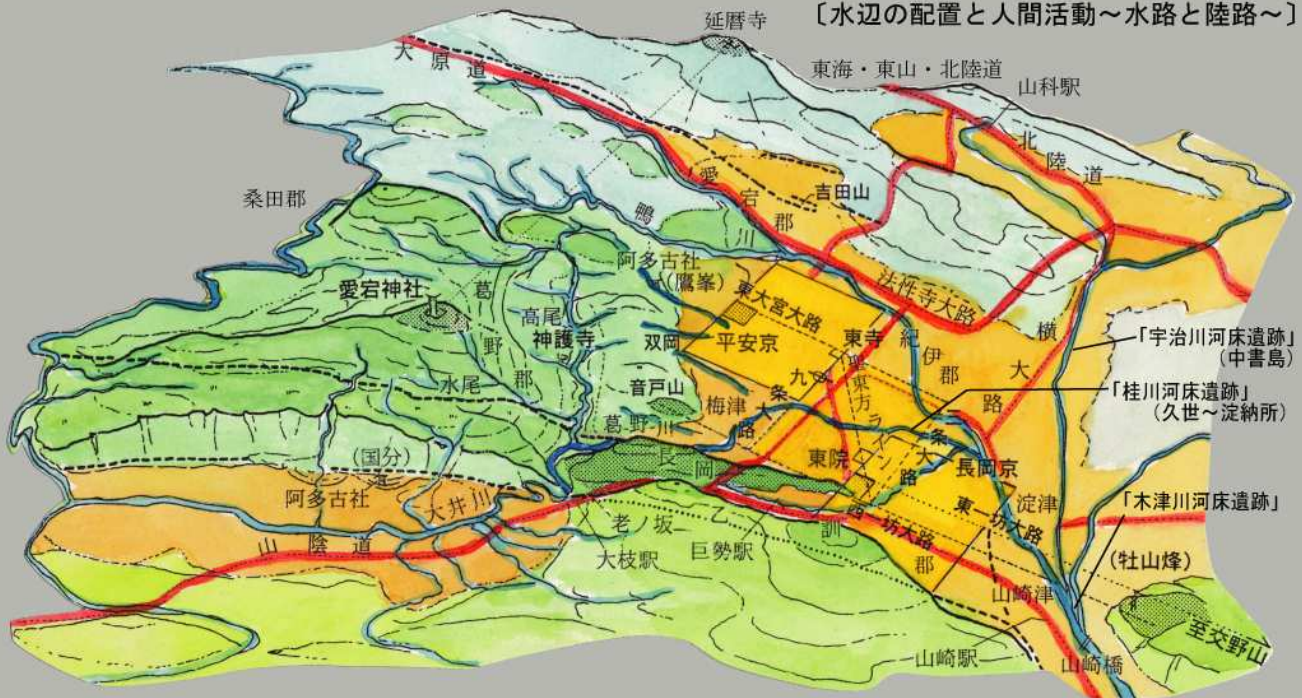
〔水辺に水辺をつくる～インテリア、邸宅・庭園と自然のつながり～〕

私たちのくらしと自然のかかわり～古代と現代～

〔水・陸の分布～盆地の地形・地質条件～〕



〔水辺の配置と人間活動～水路と陸路～〕



京都盆地北部の景観模式図



水辺ワークショップ（遠景に三川合流点、木津川河床遺跡2009.7）



「宇治川河床遺跡」（遠景に旧巨椋池、中書島2008.7）